

# Hawthorne の短篇小説に於ける五人の Faust 群像

鵜木 奎 治 郎

## I

William Bysshe Stein は *Hawthorne's Faust* なる著作で、特に “Five Faustus” なる一章を設けていて、その中で Hawthorne の短篇小説の中、“The Birthmark”, “Rappaccini's Daughter”, “The Artist of the Beautiful”, “Drowne's Wooden Image” と “Ethan Brand” をとりあげて、之を Hawthorne の人生に対する哲学的批評が現れたものであるとみている。私は前に「ホーソーンの短篇小説における技術者の肖像」<sup>(1)</sup> なる拙論を物した時に、この Stein のあげた 5 名の Faustus の中の 4 名を取り上げたことがあり、その取り上げ方の順序は “Drowne's Wooden Image”, “The Artist of the Beautiful”, “The Birthmark”, “Rappaccini's Daughter” の順であった。そしてこの拙論を書いた時点に於ては不覚にもまだ Stein の議論を十分吟味していなかった。私は、拙論を書いた時点に於ては私なりに、何故 4 篇を、そして何故私の取り上げたような順序で組上にのせたかについて、私なりの説明を試みたつもりである。

Stein の取り上げた順序は、私の取り上げた順序と一部分は相違し、一部分は同一である。私は先ず芸術家から先に取り上げた。Stein は科学者から先に取り上げている。そして Stein は 4 篇の精神が凝集されたものが “Ethan Brand” であると見ている。以上は相違点である。次に同一である点は、芸術家及び科学者として分類した Drowne, Warland (以上は芸術家); Aylmer, Rappaccini (以上は科学者) の分類の方法である。但し、私はこの芸術家対科学者という二つの種族に一応は分類しながらも、結局は両者とも技術者として把握することによって同一位相に於て捕え得るとしているのに対し、Stein ははっきりと区別したまま押し通している。私が “Ethan Brand” を除外したのは、この作品が前記 4 作品とは異質なものであると見たからであり、この点に於て、Stein が “Ethan Brand” を前記 4 作品の集大成と見た視点<sup>(2)</sup> と必ずしも相異なるものではない。

ここで、私の興味は、Stein が何故この 5 つの短篇小説を “Five Faustus” として捕えたのかということと、その排列の順序に関してどんな論理的説明を行っているかという二点にしばられることになる。私が Stein の論文を吟味していなかった時点に於て、たまたま私の選んだ 4 篇と、Stein の選んだ 5 篇 (1 篇は特別なものと本人が断っているのだから、結局は 4 篇だけを別に考えることができる) が全く同一作品であり、しかもその排列の順序が異っている、それは何故かという点に、私の主体的な問題提起がかかっているのである。

従って、私が先ず行いたいことは、Stein の論文の分析である。次に、私は Stein の束縛を離れて、自由に私の論理を展開しようと思う。

## II

Stein は書名から明かな通りに、徹底して Faust という archetype で5つの作品を裁断しようとしているのである。彼によると、Faust は俗界を離れた超越的なものに対するあこがれと、地上的なものに対する執着によって生じた conflict によって特徴づけられるという。前者はある時は科学であり、又ある時は芸術である。後者はある時は近親者に対する愛（特に女性に対する愛）であり、又ある時は人類一般に対して“the magnetic chain of humanity”を失うことなのである。彼の短篇小説では、主人公は彼を取りまく外界と衝突するだけでなく、自己の内心で衝突する感情を克服することが主題となる。Stein の言葉を借りて簡潔に要約すれば“Confronted with this hideous image of the basic imperfection of human nature, he must make a choice.”<sup>(3)</sup> という主体的実存的選択を迫られているのが人間だということになる。そしてこの葛藤を克服して“individual salvation”に到達するという形式が長篇短篇を問わずすべての作品の中に認められると説かれる。<sup>(4)</sup>

だが、これは性急な推論ではなかろうか。確かに“Drowne’s Wooden Image”と“The Artist of the Beautiful”に於ける登場人物たちは、何れも精神の高揚した興奮状態はやがて沈静するところとなって、話は一種の catharsis へと到達して緊張から解放される。だが、“The Birthmark”や“Rappaccini’s Daughter”に於ては、一体誰が解放されたというのだろうか。私の目にうつるものは混乱しきって、慌てふためいている人間像ばかりである。又“individual salvation”に到達し得たにせよ、失敗したにせよ、その心理状態はどうであったろうか。Stein は“the meaningful conflicts in his stories are resolved in the consciences of his characters,”<sup>(5)</sup>と説いている。ところがその舌の根も乾かぬ中に、Stein は Hawthorn の作中人物は特殊な歴史的存在であると同時に、又普遍的な人類一般 (all mankind) をも同時に予想して描いたものに他ならないのだから、集団の深層心理を説いた Dr. Carl G. Jung の学説を忘れてはならないと説くのである。<sup>(6)</sup> だがおよそ良心の問題に於て、無意識はありえない。良心とは、己れの罪を意識的に自覚することであり、又その状態にとどまることなく、永遠的で絶対的なものを志向するところにあると云わねばならない。良心は決して、本能とか社会とか集団の声のみで解釈してはならないのである。罪の意識とは永遠の秩序から離脱しているということ、自らの責任において自覚することなのである。罪は自らがまねいたものであることを自覚した時、人間には悔恨が生ずる。だが、それは結果論なのであって、人間が良心に基づいて行為した時に、その良心自体を裁く何等の基準もなく、端的に云えば良心は如何なる場合でも誤ることはないのである。

従って Hawthorne の作品を捕えて、ある時はその作中人物の動機を即ち良心のみを論じある時はその作中人物の行為の結果を社会心理学的見地から無意識という一点にのみ焦点をあてて論ずることは、一見 pragmatic な手法に見えながら、Hawthorne 文学の本質をゆがめる恐れが多分にある。私が云おうとしているのは Hawthorne の文学を深層心理学的見地から扱う態度がすべて誤りであるということではない。Hawthorne が無意識の状態にある人間を描いた時には、一応その通りに受けとる、又意識のはりつめている人間を描いた時には、やはり一応額面通りに意識的行為として受けとる素直さが必要で、その根底にたくらま

れた無意識的な動機などを先走って探る必要が、必須とされるわけではないということである。誤解を避けるために、くり返して云いたいことは、無意識的な動機を探ることは、二次的な戦略として備蓄しておくべきだということである。Hawthorne の作中人物の個人的体験が、単に個人的体験としての意味にとどまらず、“all mankind” というものを目差しているとすれば、それは哲学的な意識的志向性に基づいて要請した結果、そういう事態を惹起したのであって、作者があらかじめ心理学的な効果を計算して作品の中に演出したとは限らないということである。Hawthorne は素朴な技巧家である。

次に Stein の “Five Fausts” の三つの分類について批判的検討を試みよう。彼は Calderón の *Il Mágico Prodigioso* が the Spanish Renaissance の時代精神を、Marlowe の *Faustus* が the English Renaissance の時代精神を、Goethe の *Faust* が純粹理性に頼るあまり信仰心を失った時代の近代精神を現わしているように、Hawthorne の描いた Faust 群像は “the nineteenth-century American mind” を具現しているというのだが、その事自体の認識は私も変わらない。Faust と定義された以上、既に述べた two souls が主人公たちの胸に宿っていることになる。先ず “The Birthmark” に於ける Aylmer にあっては “One focuses its love on the wife, the other on scientific study.”<sup>(7)</sup> と敷衍される。従って Georgiana は Goethe の *Faust* に於ける Gretchen に相当することになり、彼女は自己の ego を殺して夫のあくなき科学的探究精神の前に膝を屈することになるが、それはあくまでも彼女の彼に対する愛故に他ならないと Stein は考える。Stein は Georgiana の次の言葉を引用してこの論証の証拠としている。

“Life is but a sad possession to those who have attained precisely *the degree of moral advancement at which I stand*. Were I weaker and blinder it might be happiness. Were I stronger, it might be endured hopefully. But, being what I find myself, methinks I am of all mortals the most fit to die.” The scientist fails to heed her words.<sup>(8)</sup> (*italic mine*)

この作品を完全に Gretchen 悲劇として定義することができるだろうか。Georgiana は完全に自我を喪失して無私の心境となり夫のあくなき科学的探究精神に身をゆだねようという気持を持ち続けたのであろうか。たしかに Stein の引用した上の Georgiana の言葉は Stein のいう主張を満足させるようにも思われるが、又一方では、“*moral advancement at which I stand*” には彼女自身の自画自讃とみられる自信が溢れているとみることはできないだろうか。Georgiana の発言は、弱い者の発言としてはあまりにも Pascal 的な強さがみなぎっているように思われる。例えば次の Georgiana の言葉は、やがて彼女自身にも自らの birthmark が夫の科学によって除去されることを願う気持が生じたものであると解釈できないだろうか。私の言う解釈とは、既に述べたように、彼女の発言の裏にあるものをあれやこれやと詮索することではなくて、彼女の発言を端的に彼女の意志の表明として受け取ることである。

“Danger? There is but one danger—that this horrible stigma shall be left upon my

cheek!” cried Georgiana. “*Remove it, remove it, whatever be the cost, or we shall both go mad!*” (*italic mine*)

彼女は夫の幸福の為にのみ自らを犠牲にしたのではない、彼女自身の egoism も既に芽生えていたのだと私は見る。彼女も Aylmer の宿痾となった完全主義 (perfectionism) のとりこになっていたのだと私は見る。Stein は Georgiana を Christ にたとえ、丁度 Christ が自らを犠牲にして人間を救おうとした行為が、現在に於ても未だ結実していないように、Georgiana の行為は空しい自己犠牲に終わったと見ており彼女自身の中にある egoism を全然無視している。<sup>(9)</sup> 又 Aylmer の perfectionism は現在の原水爆の起源となったものであるとしているが、原水爆は Aylmer のような錬金術師的な手工業的規模から生まれたものではなく、そこに論理の飛躍があるように思われるが、一方 Stein は “the first of Hawthorne’s Fausts”<sup>(10)</sup> とも述べているので、“The Birthmark” を以て、すべての Hawthorne の Faust 物語の archetype と見なそうとするのあまり、強引な解釈を試みようとしたのだと見ておきたい。Stein が “The *girl’s* final statement to her husband signifies her willingness to sacrifice herself to his science”<sup>(11)</sup> (*italic mine*) と、既に人妻である Georgiana を、もっぱら口語体で使用される時のみ「妻」の意義が生じてくる筈の ‘girl’ という呼称を論文に於て使用しているのも、同様に解釈することができる。ところが、Stein が Georgiana の archetype とみなした Goethe の Gretchen は、人妻ではなく処女なのであった。処女が我が身を犠牲にするのと人妻が我が身を犠牲にするのでは、決定的な差がある。人妻が我が身を夫の犠牲に捧げるのは、ある意味では当然である。

次に Stein の “Rappaccini’s Daughter” の解釈に移る。Stein は “The Birthmark” の解釈を終えた時点で、直ちに “Rappaccini’s Daughter” の解釈に移行しているのだから、“The Birthmark” の延長線上にこの作品を考えていることは明かである。Stein は、Rappaccini を以て “the epitome of moral insensibility”<sup>(12)</sup> と紹介するが、それは彼が “Typical of the scholar who pursues learning as an end in itself”<sup>(13)</sup> の人であるからに他ならない。しばらくすると、Stein は “He (=Hawthorne) perceives that a science which advances more rapidly than morals will create an *ethical* reality of its own.”<sup>(14)</sup> (*italic mine*) と述べるが、之は奇妙な発言である。自然科学はもともと新カント学派の説くように没価値科学なのであって、それ自体に倫理は始めからないのである、“an *ethical* reality” と云わずに a logical reality と云うべき所である。つまり Stein が “Thus Hawthorne submits the thesis that man’s spiritual unrest derives from his Faustian desire to apprehend the eternal truths of the univers.”<sup>(15)</sup> と定義した時に、Faustian desire そのものの倫理性をどう把握していたのであろうか。Stein の解釈を見ると、科学者はそれ自体は倫理的な存在者として研究を開始したにしても、彼の研究が進行するにつれて非倫理的な存在者になっていくと云っているようでもあり、又一面では初めから Rappaccini を以て “moral insensibility” の体現者と規定しているのだから、科学者はもともと非倫理的な存在者なのだという、新カント派的な解釈を下しているようにも思われ、論理が混乱している。要するに “truths” を把握したいという Faustian desire は倫理的な desire なのか、又は倫理と相反する性格を持つものなのか？ 科学者として不完全な業績をあげることがむしろ優れた科学者としての第一の条件になるのか？ こ

ういう問題についての追求が曖昧であるように思われる。

ところで“Rappaccini's Daughter”は何時でも Rappaccini が主人公なのか、それとも娘の Beatrice の方が主人公なのか、よく問題にされる作品である。とにかく Faust 物語には、未婚の Gretchen が必須の存在であり、この場合は“The Birthmark”の Georgiana が既婚の女性であったのに比べて Beatrice は、より適格に Gretchen と見なしうる資格を備えているように思われる。この点につき Stein の意見を聞かなければならぬ。

Coincidentally, as in Goethe's *Faust*, a woman stands at the crossroads of destiny in each crucial endeavor of these five Fausts, pointing the way toward the self-knowledge that will return them to the precincts of common humanity and will perhaps reconcile the contradictory impulses within their hearts. Georgiana in “The Birthmark” and Beatrice in “Rappaccini's Daughter” are *counterparts* of the mythic spiritual guides who those heroes chosen for great destinies toward the goals attempt to lead most beneficial to society. ...Though she (= Georgiana) voluntarily chooses death in order to guide Aylmer to truth, she fails in her mission, as Christ has apparently failed. ...*Similarly, Beatrice in Rappaccini's new Eden symbolizes the selfless love that must inspire the scientist in his quest toward truth.* In this garden of inverted values she preserves an inner humility and nobility that neither Rappaccini nor Giovanni in their egocentricity can recognize.<sup>(2)</sup> (*italic mine*)

“*Similarly*”という一句で明かなように、Beatrice と Georgiana は全く同一位相に於て捕えられているのであるが、つまり Beatrice 自身にもあったと私には思われる egoism は又も無視されているわけであるが、彼女にとって大切であったのは父親である Rappaccini だったのか、それとも恋人(?)である Giovanni だったのか。言うまでもなく Giovanni の方であるが、Giovanni は Rappaccini 程の学者ではなく、又当然のことながら Beatrice は Rappaccini の妻ではなく娘であるにすぎない。彼女の存在が父親の真理探究への思慕を刺戟したにしても、それは Georgiana のように自己を犠牲にして、あるいはその行為自体に喜びを見いだして行った行為ではないのである。Stein の図式によれば、どうしても Faust は Rappaccini であり、Gretchen は Beatrice ということになるが、この解釈は以上で示された通りいささか無理である。又 Georgiana と Beatrice を以て“*counterparts*”と Stein が表現していることの意味は何であろうか。この二人の女性の性格が対蹠的であるということの意味しているのだろうか、それとも Georgiana と Beatrice の性格をたして二で割ると Gretchen の性格になるというのだろうか。その辺りの論理が後一つ不十分である。

続いて“The Artist of the Beautiful”に於ける Owen Warland と“Drowne's Wooden Image”に於ける Drowne に、Stein は又 Faust 像を発見しようとしている。三番手に登場する Owen Warland の導入部は次の通りである。

In thus condemning the quest for scientific perfection that blinds its aspirant to social

and moral responsibilities, Hawthorne is not unaware that *the materialistic aspects of his age* are just as degrading to the spirit. In "The Artist of the Beautiful" Owen Warland's desire to create ideal beauty is symbolic of those eternal spiritual values, embodied in man's conception of the divinity, that mercenary world is fast destroying. Therefore Hawthorne's portrait of Warland is an objectification of the Faustian aspiration of the artist:<sup>(3)</sup> ...(*italic mine*)

以上で分ることは、Warland は全く Aylmer や Rappaccini とは異なる artist として捕えられているのであり、Faust 群像の中の一側面の代表者として見られているにすぎず、Rappaccini から Warland に論点を移行する上での論理的な説明が欠けている。そして、"The experience of the carver in 'Drowne's Wooden Image,' though *similar* to Owen Warland's,<sup>(4)</sup> ..."(*italic mine*) という Stein の言葉で分るように、今度も又極めて常識的に Warland と Drowne を同じ位相に属する artists としてのみ諒解しているのである。芸術家の問題というよりも、当時の時代精神を否定する者の象徴として芸術家を以て Hawthorne は代表せしめようとしたと Stein はみなしているのであって、Aylmer と Rappaccini の解釈の場合は極端に前衛的な現代の科学者像を彷彿せしめるものがあつたのに対し、今度の場合、芸術家として把握された肖像は全く前衛的な現代風の解釈ではない。この点当時のアメリカで芸術家の置かれていた地位が非常に不安定なものであつたことを考えると（そして現在でもアメリカに於ては、所謂科学者が専門的職業としての地位を認められているのに対し、所謂職業的芸術家なるものは日本における程その地位が確立されていないという事情と照応するかの如くであるが）Stein の指摘は、アメリカの社会学的事実をよく反映しているのかもしれない。しかしそれは社会学的事実であつて、文学者としての Hawthorne の文学的事実性の解明に当つては、scientists と artists を機械的に二分するだけで足りるとするような問題ではない筈である。Annie が俗物であり、Warland は、たえず Annie への愛にひきずられながらも、躁鬱者患者のように結局は自らの美の世界を構築していく。この過程にあつて Annie は、Stein の云う "Instead of inspiring Warland, she retards his genius."<sup>(5)</sup> という指摘通りに行動する。Gretchen にあつては彼女の純粹さが Faust を開眼させたのであるのに対し、今度の場合は、Annie の不純さが Warland を開眼させていくのである。だから、この場合はいわばマイナスの Gretchen 役を勤めているわけであり、Faust の parody ではあつても正確に Faust そのものではない。Annie の父親 Peter Hovenden を以て Faust 劇に欠ぐべからざる devil の役割を果すものとみた Stein の考察は納得できる。父親は正に一種の契約によって娘 Annie の夫たるべきものを探していたと云えるからである。だが、Warland の内面性を重視するのあまり、次のように Warland の性格描写が試みられる件に至ると、首をかしげざるをえない。

To Hawthorne the idea of the beautiful is any inspiration exalted by the individual that will illuminate the life of mankind. It may be a philosophical system that has as its goal the reform of the world, or the message of a prophet, like Christ or Buddha, which will turn the thoughts of men inward toward an awareness of themselves *in all*

*their imperfections,...*<sup>(48)</sup>”

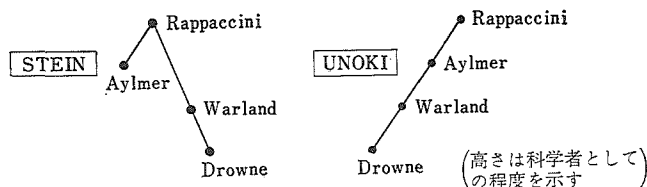
。Faust のいかなる側面をとり上げるにしても、‘perfectionist’ を目差す者でなければならぬということ、あくなき追求者でなければならぬということは必須の条件の筈であり、こう考えると Warland を以て東洋的な足らざるを以て自足の境地にあるを良しとする ‘imperfectionist’ と定義するにはためらいを感じる。又、彼は芸術家そのものでもない。彼の作りだした微小極まる機械仕掛けの蝶は、芸術品であると同時に、あるいはそれ以上に精密機械でもあったわけで、こういう視点から見ると、彼は芸術家である以上に技術者であったといわねばならず、彼の作り上げた精巧な機械の蝶が Annie の子供のたなごころで、いとも簡単にこわれたのは、精巧な機械であったが故にこわれたのであるとも言える、何故なら精巧なもの程こわれ易いからであり、少くとも彼が芸術（と一応名づけておく）の途に於ては、Stein の言葉とは逆に ‘perfectionist’ であったことを物語っている。

“Drowne’s Wooden Image” に関する Stein の記述は比較的簡単であって、周囲の社会という Puritanism の因襲に染まった社会を、硬直した、芸術家の存在を許さぬ環境とみて、結局 Drowne をこの社会に敗北した力弱き Faust と見なしているのである。<sup>(49)</sup> 折角この書物の冒頭に於ては、Jung の集団の無意識を持出したのであるから、そして Drowne は夢遊病者の行動をとっている時にのみ、Faust 的な性格を表わして、Hawthorne の原文によれば “Drowne has sold himself to the Devil” と環境社会から取り沙汰されていたというのであるから、むしろこの Puritan の社会を逆説的に devil とみて、この devil と無意識の内に契約を結んだ時に、彼の一時的天才が発揮されたという具合に、説明をしていたら、Stein の議論は非常に説得力があったのではなからうか。それは、私のみるところでは、以上挙げられた Aylmer, Rappaccini, Warland, Drowne の中で、意識的に自覚していない行為をしたものは Drowne だけであったと思うからでもある。Aylmer と Rappaccini に至ってはその行動は意識的を通りこして、計画的ですらある。Stein によって同じく芸術家としての刻印を押された Warland にしても、Crowley のやや強引な説を採用するなら、その名称は「戦場」<sup>(50)</sup> という、人間に瞬時の意識の弛緩をも許さぬ厳しいものであったのだ。女性の側を見てみても Stein によって Gretchen 役を帰せられることになった Aylmer の相手役である妻 Georgiana, Rappaccini の娘 Beatrice は、Stein によると明かに献身的・自発的の聖女である。又 Warland を見捨てた俗物 Annie にしてみても、その行動には意識の志向性がある。そしてただ一人、Drowne を一時的天才に覚醒せしめた a young Portuguese lady of rank だけは、全然 Drowne を意識の対象としていないからである。

最も無理なく Faust 物語として理解できるのは、Stein が一番最後に “the mid-nineteenth-century New England mind”<sup>(51)</sup> として登場せしめた “Ethan Brand” であり、彼の言う通り “Ethan Brand is the great Faust of this period of Hawthorne’s writing”<sup>(52)</sup> そのものである。完全に私に理解できる以上、その解説を行う必要はない。何故なら、少くとも拙論は Stein の解説ではなくて、Stein の論文に触発されて、私自身の解釈を樹立する論文であった筈だからである。

前節で得られた結論は、Stein の解釈した Five Fausts は強引であり、特に Gretchen の解釈には無理が伴い、又 scientists と artists をあまりにも判然と二分しすぎていて両者の関連が考えられていないということであった。私が同意できるのは“Ethan Brand”が最も Faust 的性格を具現したものであるということだけであったと言ってもよい。Archetype を用いて説明しようとするならばこのような無理が伴うことはむしろ当然である。

私は以上5つの作品に十分 Faust 的要素があることを認めながらも、なおそれで裁断し尽くせぬものがあることを認める。従ってあまりにも典型的な Faust 物語である“Ethan Brand”を、正に Faust そのものの復刻であるという理由に基づいて除外する。又 Stein の並べた順序は、現代の科学時代の symbol としての見地から Five Fausts を見ているように思われる。Stein は既述の通り、Warland と Drowne を artists として見ていて、scientists としては見ていない。だが Warland の技術は勿論、Drowne の木彫師としての技術にも scientists としての性格が皆無ではありえない筈である。そこで私は科学者としての性格が最も強い者から等級をつけると、Rappaccini-Aylmer-Warland-Drowne ということになると思う。Stein と拙論では、これらの主人公たちの排列順序は次のように変る。



一見して明かなように、Stein にあっても私の場合でも Rappaccini に焦点が当てられているかの如くであるが、Stein の場合は Rappaccini は山頂にあってその Faust 的な知的探究精神がとにかく強調されているのに対し、私の場合は、ただ技術者の技術の進歩という観点から見て、年代史的に並列されているのである。Stein は現代を科学の時代、そしてその科学主義的性格故にもたらされた危機の時代として理解しているのである。だが、私のグラフは

Drowne Warland Aylmer Rappaccini

“Rappaccini’s Daughter”を Hawthorne の傑作と認めながらも、同時に又 Hawthorne には他のもう少し優雅な、鋭角的でない、静穏な要素もあることを認めることをためらわないつもりである。果して愛に、科学のような進歩があるだろうか？

私が基準として選びたいものは、文学永遠の課題である「愛」である。Goethe の Faust は言葉の真実の意味に於て Gretchen を愛したと言えるのであろうか。Goethe 自身がそうであったように、Goethe の創作になる *Faust* も、己れの倫理的な成長の為に、Gretchen を (Goethe 自身の場合は更に多くのあまたの女性を) 利用したとは言えないだろうか。この点を批判したのは Kierkegaard であった。こういう視点に立って今一度

Drowne Warland  
Aylmer Rappaccini

Drowne の場合は彼が一目ぼれした a young Portuguese lady of rank との間に、相互の



意志の確認があったろうか。おそらく身分の違う相手の女性は Drowne の存在すら意識しなかったであろう。Drowne も又、彼女を垣間みるだけで満足し、陶醉にひたっている間だけ彼の靈感が湧き、その間だけ一時的な天才となることができた。Drowne 自身も又相手の女性と同じように、靈感が去った後では、自分が誰かを愛したという事実すら忘れていたのかもしれない。ここには身分の相違という厳然たる掟がある。そういう地位が二人の間の愛の障壁となったと言えるであろう。

次に Warland の場合はどうであろうか。この場合も Warland と Annie との間の身分の差は歴然としている。しかしその身分差は Drowne と a young Portuguese lady of rank の場合程、歴然たるものではない。Warland の師 Peter Hovenden はひそかに、自分の娘 Annie の配偶者たるべきものは、Warland であるべきか Robert Danforth であるべきかと、選択をしているのである。Peter Hovenden の選択が比較的早くきまるのに対し、娘 Annie にはしばしば Warland を誘惑するかのような迷いがみられる。しかし、それは女性の媚態なのであって、実は、父以上に未来の実質的な夫としては Warland は自分の相手たりえないことを見抜いているのである。だから Annie と Warland の結婚をさまたげたものは、身分差でもなく、Peter Hovenden でもなく、Robert Danforth でもない、正に当事者たちの意志に基づくものなのである。Annie は Warland に若干の敬意を混えながらも、最後は軽蔑と憐憫で接し、Warland も又ことさらに彼女を無視しようとする。

以上の二例に於ては、まだ人間そのものの尊厳はそこなわれていない。即ち登場人物たちの本質はそこなわれていない。変化したものとすれば、彼等の精神だけである。ところが “The Birthmark” における Aylmer は、妻 Georgiana の肉体を改造しようとし “Rappaccini's Daughter” における Rappaccini は娘 Beatrice の肉体を改造しようとし、その娘 Beatrice ですらも、Giovanni の肉体が彼女自身との接触によって改造されることを熟知していたのである。Georgiana の、又 Beatrice の精神の高貴性が、その肉体の変容によっていささかも損われることはなかったと考えることはあまりにも容易である。だが、キリスト教の脈絡に即して考える時、霊と肉が共に重視されねばならず、少くも人間の<sup>本質</sup>という概念には、人間の持つすべての<sup>本質</sup>の属性が含まれている筈である。

Aylmer は Georgiana の<sup>本質</sup>を変えるという仕事に異常な迄に熱中する。そこには、既に Drowne に見られたような、恋愛そのものへの激しい葛藤はない。又 Annie に見られたような、愛の功利的な計算もない。“Drowne's Wooden Image” や “The Artist of the Beautiful” に於ける当事者たちは、結局のところ、肉体的にも精神的にも、互いに邂逅しあって、相互にその存在理由を確認しあうという作業がない。要するに、あく迄も彼等の愛の障壁ともなり、同時に原動力ともなったものは、当事者たちの身分差なのである。当事者達は本質を相互に承認しあう機会を与えられていなかったのである。ところが “The Birthmark” に於ては、既にこの身分差という限定条件は消えている。それどころか、少くとも “Drowne's Wooden Image” や “The Artist of the Beautiful” のような意味に於ける、恋愛への<sup>あこがれ</sup>、たわむれは消えている。つまり恋愛は、作品の始った時点に於て既に終了している。我々が身分差に関係なく恋愛の対象を選びうる時代になったことを、この物語は告げている。主人公たちが、如何なる経由を経て結ばれるに至ったかということに就いては、この作品は全くふれていない。この点に就いては *The Scarlet Letter* の主人公たちと同様である。

Aylmer と Georgiana は、Roger Chillingworth と Hester Prynne が結ばれた契機が作品の中に描かれていないように、又 Rev. Mr. Arthur Dimmesdale と Hester Prynne が作品の始った時点に於て既に姦通が終了していたというような事情も描かれていない。だが、象徴的に言えば、Aylmer と Georgiana はこの物語の始った時点に於て、互いに本質を確認しあって結婚した筈なのに、少く共 Aylmer は妻の本質を人間の力で変えようとしたのであるから、不完全性という人間の最も重大な本質を見事に見落していたことになる。

即ち、身分差に関係なく相互の本質を確認しあって近代的な主体的な恋愛が成立し得た筈なのに、その本質確認の作業が誤っていたと主人公たちは感ずるのである。不完全なままの配偶者を愛することができなくてより完全であると思われる本質を持ったものに変えようとする Aylmer の努力は、人間の本質確認の作業が如何に不完全なものであるかを示しているのだ。Stein は Aylmer を指して“perfectionist”と称したが、実は Aylmer は imperfect-ionist だったとも言うるのである。人間は不完全な方が完全だという逆説に気づかなかつたのだ。整形した妻 Georgiana を愛したいと願うことは、そして最後は Georgiana の方でもその整形を希求しているのだから夫と同罪ということになると私は思うのだが、いわば姦通を犯したいと願っているということと同じであり、*The Scarlet Letter* と同じ主題を扱っているとも言うるのである。こうして、この作品に於ける意味は、異性同志が互いにその本質を規定し直すという、無限に続く空しい努力を示しているということになる。

“Rappaccini’s Daughter”に於ては、事情は一層深刻となる。Rappaccini の妻の姿は作品全篇を通じて一回も姿を見せない。作品の中に書かれていないことに就いて憶測をたくましくすることは慎まなければならないが、Rappaccini の妻は死去しているのだろうか、離婚しているのだろうか？ とにかく、“Drowne’s Wooden Image”や“The Artist of the Beautiful”や“The Birthmark”の諸作品に於て問題とされたような男性と女性の恋愛の物語ではないのである。次の世代、子孫の世代の恋愛の物語なのである。Rappaccini の行為は、その行動に即して考察しなければならない。自分の妻のかわりに Beatrice を、又、男の子の代用物として Beatrice を愛しているように思われる。そして Stein 流の言方をすれば、Beatrice を女性としての Faust にしようとするかのように思われる。大団円の場で、父を呪う Beatrice の言葉に対して、善意の父は驚いて“Dost thou deem it misery to be endowed with marvellous gifts against which no power nor strength could avail an enemy—misery, to be able to quell the mightiest with a breath—misery, to be as terrible as thou art beautiful?”とききたですが、この言葉は女性も Faust たりうると錯覚したものの誤りを示している。ある意味では、Beatrice は Faust だったのかもしれない、Rappaccini を失意にみちびき Giovanni を驚倒せしめたのであるから。しかし同時に自らも滅びている。だから Leslie A. Fiedler の *The Scarlet Letter* 論にみられるように、“If *The Scarlet Letter* is, indeed, an American *Faust*, Dimmesdale is not really Faust himself but Gretchen, a secondary sinner lured on to destruction by a stronger one whom he loves, a tremulous victim led astray by daring arguments.”<sup>20</sup> と断定することはできない。Giovanni はあるいは Gretchen かもしれない、しかし Beatrice はまだ Faust にはなりきっていない。

原点に帰ろう。私が“Drowne’s Wooden Image”や“The Artist of the Beautiful”に於て問題としたような身分差は、この場合、Beatrice と Giovanni の間には問題となっていない

い。彼等の間にある感情は、相互のあくことなき本質の確認である。一挙手一投足、言う言葉の一言一言が、呼吸すらもが、相互に注目的になる。従って彼等の行動は各自の自由意志に基づいているように見えるが、決してそうではない。それはあくまでも父 Rappaccini の策略に基づいて、たくまれた恋愛の実験なのである。Rappaccini は始めから、Dame Lisabetta を通じて、Beatrice と Giovanni を毒の Eden の園の、新しい Eve と Adam に仕立て上げようとしていたのであると私は解釈する。Giovanni を毒の花園に誘い込もうとする Lisabetta の次の言葉だけで、Rappaccini の計画が以前から練られたものであったことが判明する。“Yes; into the worshipful doctor’s garden, where you may see all his fine shrubbery. *Many a young man in Padua would give gold to be admitted among those flowers.*” (*italic mine*) Stein は、Rappaccini の科学者としての Faust 像のみに注目していた筈なのに、それなら perfectionist としての科学者に就いての理解はもう少し、辛辣であってもよいと思うのだが、この件についての解釈は、“When he (=Rappaccini) realizes that he has *unwittingly* isolated her from normal human love, he insidiously subjects *a young man* to a treatment making the latter a fit bridegroom for his daughter” (*italic mine*) と意外にも甘い。ところが、Lisabetta の言う“many a young man”と Stein の論文の“a young man”は、殆んど同じことを物語っているのである。即ち Beatrice の配偶者は誰でもよかったのだという事実を示しているのである。つまり Beatrice の恋愛の相手になるものは、身分差でもなく、完璧な男性としての本質を持ったものでもなく、とにかく一応男性としての機能を果してくれるものなら何でもよかったわけである。又 Beatrice の側にしても、毒の花園に幽閉されていたのだから、他の男性に接触する機会は全然なかったのであり、たまたま接触した Giovanni が、彼女の接した外界の男性第一号であったために、彼女は Giovanni を愛するようになったのだと推理することはできないだろうか。彼女が Giovanni を愛するためには、少なくとも二人以上の、即ち複数の男性と比較した上で Giovanni を選択したという条件がそろっていなければならない。こう考えると、Beatrice と Giovanni の間の愛の障壁は、身分差に基づくものでも、異性の本質把握如何に基づくものでもなく、一に相手が誰であってもよいという代用物としての無責任さに基づく、新しい障壁である。

あるいは Giovanni には、この様式はあてはまらぬと非難されるかもしれぬ。彼は自由な意志で毒の花園を離れて、Beatrice との接触を絶つことができた筈であると。従って彼は Beatrice を、真の恋愛の対象になりうる存在者として選択する余裕があったのだから、彼の自由意志は責任を問われてしかるべきであると。我々は既に今まで幾度も、このようにして、Giovanni の卑怯さが糾弾される論文を見てきた。しかし、果して Giovanni には、その自由に行使し得た筈(?)の意志の責任を問うるような、条件が与えられていたであろうか。Giovanni を糾弾する考え方の中には Rappaccini’s Garden だけに毒が充満していて、その周辺部は一切無害である筈だという考えが根底にあるのではなからうか。ここは創世紀にある Eden の園とは違って、周囲から垣間みることができたのである。Giovanni は自分の下宿から覗くことができたが故に、Beatrice と邂逅することができたのである。創世紀の Eden の園が密室であったのは、善が世界に伝播していくことの困難さを象徴していると言えるし、Rappaccini’s Garden に外部と接触する途が残されていたということは、現世に於

ける悪の不気味な浸透力を象徴しているとも言える。

こうして、Giovanni も毒にあてられていた、毒にあてられた以上彼の人格は変わってしまい、他の異性と接触する機会を他律的に奪われていたと云えるのである。病におかされて、精神の自由な意志表示をなしえぬものに対して、その倫理的責任を問うるのであるか。こうして明かになったことは、Beatrice, Giovanni 共に、相手を複数の異性の中から、自己の本質にもっともかなう本質を持つものとして、選抜したのではなくて、あくまでも、とにかく一人の異性が必要であるという理由に基づいて選抜したということである。

こうして、この作品は現代の愛の不毛を象徴する物語の相貌をおびてくるようになった。Drowne's Wooden Image—The Artist of the Beautiful—The Birthmark—Rappaccini's Daughter—と進むにつれて、身分差による愛の障壁は消え、異性は一応自己の自由な意志に基づいて配偶者を選択することが可能になったように見えてきた。本質を確認しあう作業、つまり愛のかけ引きには絶大な信頼が寄せられるようになった。最後に登場する Beatrice と Giovanni は、如何にも“The Birthmark”の続篇らしく、美女・美男である。彼等は自由に自己の意志を行使したつもりであった。しかし、その背後には Lisabetta がおり、又、Rappaccini があって、彼等の自由意志を操作し、更に、その Rappaccini ですら、彼の科学では遂に諒解できない運命によってあやつられていたのだということを認めなくてはならなかった。こうしてこの作品は、人間の自由意志の限界を示した作品となった。

現代の我々は、最適の人を選びえたと自称して恋愛し、結婚し、そしてそこに自分の自由意志を行使しえたつもりである。しかし、実は代用機能としての異性を、恣意的に選んで、しかもそれを自らの自由意志で行ったと思こんでいるにすぎない。

私はこの章の冒頭の部分に於て、Stein と違って、この拙論では4組の作品に描かれた愛を、すべて同じ水準に於て取り扱いたいと述べた。現代の科学万能主義に基づく混乱に注目すれば、もっと極端に言えば混乱そのものを価値とみるならば、“Rappaccini's Daughter”が現代の混乱を最もよく象徴しているものであるが故に、最高の価値を持つものとなる。だが、混乱そのものを肯定することは、たとえそれが世界の現状であるにしても、結局 Faustian desire そのものを肯定することになる。私は近代的な Faustian desire が反省を強いられているのが、現代の一側面であると思う。もし、愛の価値を混乱でなく、平静な幸福感に求めるとしたら、逆に“Drowne's Wooden Image”が最高の価値を持つものとなるであろう。結局は、文学の基準は、ともすれば文学外の基準で測定されうる危険があることを、Stein の論文は示している。即ち Faust を archetype とみなすことは、極めて有効である。だが当然のことながら、有効であるということは、同時に、その武器からこぼれおちるものも、又少くはないということである。このことさえ、自覚するなら、我々はまださまざまな、別種の archetypes を、Hawthorne 文学の中に発見することができるであろう。

## 註

(1) 拙稿「ホーソーンの小説における技術者の肖像」、『信州大学教養部紀要』第一部人文科学第6号(1972)、55—72。

- (2) William Bysshe Stein, *Hawthorne's Faust* (Archon Books, 1968), p.103.
- (3) *Ibid.*, p.5.
- (4) *Ibid.*, p.6.
- (5) *Ibid.*, p.7.
- (6) *Ibid.*, p.8.
- (7) *Ibid.*, p.91.
- (8) *Ibid.*, p.92.
- (9) *Ibid.*, p.148.
- (10) *Ibid.*, p.93.
- (11) *Ibid.*, p.68.
- (12) *Ibid.*, pp.148-49.
- (13) *Ibid.*, pp.93-94.
- (14) *Ibid.*, p.96.
- (15) *Ibid.*, p.94.
- (16) *Ibid.*, p.95.
- (17) *Ibid.*, p.97.
- (18) J Donald Crowley, *Nathaniel Hawthorne* (London : Routledge & Kegan Paul, 1971), p.38.
- (19) Stein, *op. cit.*, p.99.
- (20) Leslie A. Fiedler, *Love and Death in the American Novel* (London : Jonathan Cape, 1967), p.442.

### Summary

#### 'Five Fausts' in Stein's *Hawthorne's Fausts* Reconsidered from the Cynical Point of View

Keijiro UNOKI

William Bysshe Stein deals 'Five Fausts' in his *Hawthorne's Faust* : namely, Drowne, Warland, Aylmer, Rappaccini and Ethan Brand. Stein seems to try to find out Faustian desires in all the heroes and Gretchen-like characters in all the heroines. His analysis wins success in the case of "Ethan Brand," but in the case of the other four stories his experiments prove rough, not to say failures. Especially, Gretchen archetype can't be applicable to all the heroines, because sometimes they could not be virgins both in mind and body nor could be pure in hearts—sometimes the heroines neglected their Fausts or didn't even recognize their Fausts. My analysis should not be determined with his analysis, that is to say, though I pay my sincere regards to Stein's method, I do not think *Faust and Gretchen* archetypes are not always golden rules.

So I direct my attention to the chronological transition of Love through these four stories. In "Drowne's Wooden Image" and "The Artist of the Beautiful", difference in social standing prevents their heroes' and heroines' from becoming man and wife. In "The Birthmark", the notion that a spouse should be a complete substance *per se* denies lovers' being a perfect pair in spite of their perfectionism. In "Rappaccini's Daughter", both the hero and the heroine eagerly seek his and her counterpart, not knowing their inevitable destiny. Every story reflects various aspects of love and the spirit of the age when any kind of love is prevalent. Thus Hawthorne asks us to solve every love-affair without avoiding our responsibilities. This is a moral which is given to me by Stein's Faustian desire in analysing Hawthorne's five short stories with *Faust and Gretchen* archetypes.